

第6号様式

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 保健学 ）	氏名	岡永真由美
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
助産師を対象とした周産期の喪失ケアのための教育プログラムの実施可能性と有効性に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	川崎 裕美	印
審査委員	教 授	祖父江育子	印
審査委員	教 授	大平 光子	印
審査委員	教 授	岡村 仁	印
審査委員	講 師	藤本紗央里	印
〔論文審査の要旨〕			
<p>流産・死産・新生児死という周産期の喪失を体験した両親の反応に焦点を当てた研究は、1980年代より欧米の心理学を中心に実施され、両親へのケアの指針が紹介されるようになった。助産師は、児の妊娠・出産に関わることによって、周産期の喪失を体験した母親や家族のビリーブメント（死別）の過程を共に追い、どのようにケアをするのかを内省しながら経験を培う。これまで周産期の喪失ケアに対する卒後教育プログラムの必要性は考察されてきたものの、教育プログラムの実施及び評価に関する研究は限られており、助産師を対象としたプログラムは見当たらなかった。そこで本研究は、助産師が周産期の喪失を体験している女性や家族への知識に基づいた実践ができること、および客観的に自らのケアを評価できる態度を養うことを目指した卒後教育プログラムを開発、試行し、プログラム内容の実施可能性と有効性を検証することを目的とした。</p> <p>プログラム開発にあたり、まず周産期の喪失(perinatal loss)の概念分析を行い、助産師が周産期の喪失ケアに関して印象に残っている状況や感情の傾向を明らかにすることで、教育プログラムの枠組みを検討した。次いで、教育プログラムへのニーズを検討するために、助産師39名を対象にグループインタビュー法を用いた質的記述研究を行い、帰納的に内容分析を行った。これらの結果より、教育プログラムの目的を「助産師が、周産期の喪失を体験した女性や家族の喪失や悲嘆、わが子への愛着を理解することによってケアの意味づけができる、助産師が、自身のケアへの不確かさに伴う感情に気づき対処できる」</p>			

とした。またプログラムの目標を、1) 赤ちゃんを産んだという、体験を基本においた両親の悲嘆やわが子への愛着を理解し、ケアに意味づけができる、2) 両親が、夫婦や家族の絆を深めコントロール感を取り戻すために、施設で提供できるケアの検討を行うことができる、3) 自身のケアへの不確実さに伴う感情についてスタッフと情報共有できる、4) 実践を通して、包括的な周産期の喪失ケアの自己評価ができる、と設定した。以上の結果をもとに、講義・グループ討議から構成される 200 分の教育プログラムを完成させた。

次に、助産師を対象とした周産期の喪失ケアのための教育プログラムを実施し、その実施可能性と有効性の検討を行った。プログラム参加者は 21 名であり、プログラムの評価は、質問紙調査と個人面接を組み合わせ 3 回実施した。その時期は、教育プログラム前、プログラム終了時、3 か月後である。プログラムでの学びを実践に反映できる機会が得られるには最低でも 3 か月必要と考えた。評価内容は、プログラム内容の評価、プログラム前の周産期の喪失ケアに関する主観的な知識への自信や実践状況への自己評価 15 項目(以下周産期の喪失ケアの自己評価とする)であった。周産期の喪失ケアの自己評価には visual analogue scale (VAS) を用いた。さらに参加者には、プログラム終了直後に 3 か月後の実践目標設定を依頼し、3 か月後に目標に対する自己評価を調査し帰納的内容分析を実施した。その結果、教育プログラムの内容及び構成については、参加者の満足度が高く時間設定も適当という評価であったことなどから、その実施可能性が示された。周産期の喪失ケアの自己評価得点では、周産期の喪失ケアに関する個別ケアへの知識および実践、周産期の喪失ケア体制、周産期の喪失ケアへの気持ちの各項目において有意な得点上昇が認められた (Friedman 検定,  $p < 0.05$ )。3 か月後の自己評価の分析では、『赤ちゃんを産んだという体験を基本とした両親の悲嘆やわが子への愛着を理解しケアに意味づけができる』に対する自己評価は、【愛着や悲嘆の理論にケアがつながる】他 2 つのカテゴリーに、『両親が夫婦や家族の絆を深めコントロール感を取り戻すために、施設で提供できるケアの検討ができる』に対する自己評価は、【ケアの連続性を意識する】【ケースカンファレンスの活用】の 2 つのカテゴリーに、『自身のケアへの不確実さに伴う感情について情報共有できる』に対する自己評価は、【助産師自身の悲嘆への気づき】他 2 つのカテゴリーに、『実践を通して包括的な周産期の喪失ケアの自己評価ができる』に対する自己評価は【ケアを意味づける】【自己課題の明確化】の 2 つのカテゴリーにそれぞれ分類できた。これは、自己評価においてプログラムの目標が達成されたことを示していると考えられる。

本教育プログラムは、助産師の周産期の喪失ケアへの知識を高め、母親と父親の悲嘆の違いをふまえた夫婦の関係性も視野に入れたケアの実践に反映され、自らのケアを再確認させることに有効であると考えられる。

以上、本論文は、今後の周産期の喪失ケアの質の向上に資するとともに、周産期の喪失ケアに携わる看護者への卒後教育の推進に大きく貢献する研究として高く評価される。よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士 (保健学) の学位を授与するに十分な価値のあるものと認めた。

